

〔共済連だより〕

家畜診療日誌 子牛の事故を考える

生産獣医療支援センター 所長 二村 治司

子牛の事故率はどの程度なのか、今でも正確な数値が掴めていません。アメリカの乳牛では生まれた子牛が出産・育成期を経て、初回分娩を迎えるまでにその約1割が消失するといわれてきました。

家畜共済では平成16年度より乳牛の子牛（5か月齢まで）・胎児（妊娠240日から）の引受が開始されました。家畜共済データから子牛の事故率が把握できるものと期待していましたが、残念ながら制度上の制約によりやはり正確な数値を掴むことができません。それは成牛（13ヶ月齢以上）1頭につき2胎児の引受が生じる場合があること、胎児の引受がある成牛すべてが引受期間に分娩するわけではないという理由からです。そこで少し乱暴な方法ですが、2胎児の引受、成牛が引受期間に分娩する割合などを考慮し、家畜共済で引受のあった子牛・胎児頭数の内、実際の頭数を70%と仮定しました。こうして子牛・胎児の死廃事故率を推測しました（表1参照）。平成20年度の子牛・胎児の死廃事故率は乳牛が7.5%、繁殖和牛が4.6%でしたが、実際の頭数を70%と仮定して計算すると死廃事故率は乳牛が10.7%、繁殖和牛が6.5%となります。乳牛では1割を超え、アメリカでいわれている数値と同様に子牛・胎児の事故率が異常に高い状況が浮かび上がります。同じように前年度の死廃事故率をみると、乳牛が8.3%、繁殖和牛が5.1%であり、平成20年度の死廃事故率は急激に上昇しています。また繁殖和牛では死廃事故の内約65%が分娩時、あるいは直後の死亡でした。この原因は明らかに平成20年度に大発生したアカバネ病による異常産の影響です。

アカバネ病はワクチン接種によって防げる病気です。中国地区の近県では接種率はほぼ50%を超えるといわれています。平成19年度には既に大発生の予測がなされ、ワクチン接種の必要性が叫ばれていながら、結局のところ岡山県での接種率は30%程度に留まったようです。

近年、アカバネ病はほぼ3年周期で発生を繰り返しています。牛の更新速度が速まっており、発生周期は短縮しているようです。またアカバネ病の休眠期を埋めるように、同じく異常産の原因であるアイノウイルス病が発生しています。こうしてみると毎年、異常産への対応が必要となります。異常産の原因であるアカバネ病、アイノウイルス病の両者に有効な3種混合異常産ワクチンを毎年接種しなければなりません。接種率をせめて50%までに引き上げたいものです。

子牛が無事出産しても、危機は続きます。生後間もない子牛の疾病の半分以上は下痢です。下痢（腸炎）の原因には大腸菌、コクシジウムなどが知られていますが、一番の引き金はロタ・コロナウイルスの感染です。ロタ・コロナウイルスの感染によって免疫機能が弱まり、大腸菌、コクシジウム感染などによる腸炎を発症しています。新生子牛は母牛の初乳から十分な量の移行抗体を授かり、ロタ・コロナウイルスの感染をブロックする必要があります。このため母牛には、分娩予定の15日前（初回牛では45日前の2回）に必ず5種混合ワクチンを接種すべきです。

表1. 岡山県における成牛、子牛・胎児の死廃事故(平成20年度家畜共済データ)

種別		引受頭数	死廃事故頭数	事故率% (前年度事故率)	実際の事故率% (前年度事故率)
乳牛	成牛	17,075	1,572	9.2 (8.4)	
	子牛・胎児	15,195	1,138	7.5 (5.8)	10.7 (8.3)
繁殖和牛	成牛	5,834	94	1.6 (1.4)	
	子牛・胎児	6,784	313	4.6 (3.5)	6.5 (5.1)